

小説に登場する「英語（圏）で生きたい日本人女性たち」（1）

小 林 葉 子

小説に登場する「英語で生きたい日本人女性」

篠田節子氏の作品、『女たちのジハード』（篠田 節子, 2000）は大手火災保険会社のOLたち5名が男性社会の中で自分らしい生き方を模索していく作品で、1997年に第117回直木賞を受賞した。受賞から20年が経過しているが、主人公の一人である26歳のOL浅沼沙織のように「T火災にいる自分は仮の姿。いつかは会社を飛び出すつもりだ。そのためには自分を磨かなくては……。」(p.187), と思いつつながら英語（または別の資格）の勉強を続けているOLたちは多数派ではないにしても、稀有の存在ではないであろう。もちろん、「日本人女性」全体から見ればそうした女性は少数派なのだが、「英語で食べていきたい」と心に決めながらアフターファイブに翻訳学校に通学し続ける沙織を主人公の一人として取り上げた小説が直木賞を受賞した、という事実は重い。その一般社会への影響力は絶大だからである（例：「[売れてます] 文芸 女たちのジハード=篠田節子・著 女性たちへの応援歌」『毎日新聞』夕刊 1997年8月25日7頁）。同年10月26日にはNHK衛星第二放送「BS日曜ドラマ」『女たちの聖戦』4回シリーズとして放送されている。本稿ではまずページを追いながら小説に描かれている沙織の姿を丁寧に見ていきたいと思う。そうすることで、沙織という英語に人生を懸けようとする日本人女性（たち）に対する篠田氏と自らの見方とじっくり向き合うことが出来ると思うからである。なお、直木賞受賞後、篠田氏は彼女自身の「分身」は沙織であると語っている：「カルチャーセンターや英語講座などに通い、自分の道って何？と、模索の結果、今の彼女がある」（『ポルノ転じて直木賞となった「OL道」』『週刊アエラ』1997年11月3日77頁）。

沙織の英語に対する思いは小説の中で絶えず揺れ動いているのだが、まず前半のあらすじから紹介したい。主人公の一人として登場する当初は、「大学のときに専門だった英語の勉強だけは続けているが、こちらも特技というには、いささか心許ない。」(pp.187-188)と自覚している。その一方で、OL生活の合間に2年間専門学校の通訳講座に通い、「英語についてはまあまあ自信がある」(p.189)とも思っている。講師の細田から誘いで下翻訳をするようになり、OLと下翻訳を掛け持ちしつつもプロとしての独り立ちをするメドは立たないところへ、知り合いからの紹介で「翻訳の仕事をしたいのなら相談に応じると言ってくれたらしい」外資系企業の顧問をしている弁護士（笠原）に会う。そして彼には「特技を生かせる仕事につきたいと思っています。基本的には英語で食べていきたいので。今の仕事は損保ですが、ビジネス文書の翻訳スペシャリストとしてやっていけるといいんですが」と自己紹介している (p.204)。

結局、笠原にテストとして課せられたビジネス文書の翻訳の出来の悪さを指摘され、「危うく泣きそうになった」ところへこう慰められてしまう：「会社は、T火災っていったっけ。い

いところに勤めているじゃないか。英語なんて、わかっていると思うけど、はっきり言って特技でもなんでもないんだ」「勤めて四年目っていったよね。あと少しそこにいて結婚して、あまり遅くならないうちに子供を産むっていうのも一つの幸せじゃないかと、僕は思うけどね」(pp.219-220)。

ここでも沙織の心境は揺れている。「自分のまわりのドアのひとつひとつが、鼻先でびしゃりと閉められていく。つぎつぎに閉じられる鉄の扉の前で、自分はなすすべもなくたたずんでいる。」(p.221)と弱気になる一方で、「前途に平坦な道なんかあるはずない。障害はつきもの。強行突破するしかない。」(p.228),「いつか下翻訳などではなく、直接、注文をもらい一本立ちしてみせる。」(p.319)とも心を奮い立たせる。

そんなとき転機が訪れる。同じ翻訳の事務所で働いていた40代半ばの「中村さん」が事務所を辞め、銀行の支店長である夫と離婚し、登校拒否をしていた高校生の娘と一緒にアメリカに留学したことを本人からの手紙で知る。そして「留学という手段があったのか、とあらためて思う」(p.324)一方で、彼女は大学在籍当初からその選択肢の負の部分についてよくわかっていたはずなのである：

もちろん大学在学中から何度もそんなことは考えたが、向こうの大学の厳しい授業で単位を取ったところで、日本の企業では女性の能力はほとんど生かされないことを知っていた。英文のビジネスレターの下書きや、英文の書類のコピーと訳といった雑用を押しつけられるのが関の山と聞く。外資系会社も、日本支社の上司が日本人であるケースが多く、状況はそれほど変わらない。それがわかっていたから、OLをしながら能力を磨く、という現実的な人生設計をしたつもりだが、どうもうまくいかない。(p.324)

海外留学して就職したところで女子大学生に対する企業の冷たい態度は変わらないことをわかっていたはず沙織であっても、「OLをしながら能力を磨く」ことが「現実的な人生設計」と考えてしまうと日本OLにありがちな考えなのかもしれない。結局、先が見えない現状に切羽詰まった沙織は大学在籍時代には現実的ではないと考えていた海外留学という選択肢に心がなびいていく：「保険会社のOLも、細田の下記も、その両方に芽がない。ゼロとゼロを足しても掛けても、一にも二にもならない。思い切って海外に飛び出せば、何かが変わるかもしれない、という気がする。」(p.324)。

しかも「しかし留学して何を学ぶのだろう」という重要なテーマについては「それがいまひとつわからない」のであるが、「とりあえず翻訳、だ。あの笠原という弁護士に何を言われようと、英語で食べていきたい、という気持ちは変わっていない」(p.325)と自分に言い聞かせる。そして何故そう思うのか、何故英語なのか、というこれも重要なテーマについては「つきつめて考えたくはない」と逃げ腰の自分が見え隠れするものの、とにかく「専門と言ったら、それしかないのだ」(p.325)と自分に言い聞かせる。さらには、この追い込まれている状態から現実逃避をするかのように英文学というまるでビジネスには結びつかない選択肢に「ロマン」と「憧れ」を見いだそうとする：

英文科で四年間、専門学校で二年、そして細田の事務所で一年。七年間、英語に関してだけは専門的な勉強を続けてきた。いくら保険の仕事をしているからといって、損害保険業務にロマンを感じることはできない。何かするならやはり英語だ。思い悩んでいるより、先に状況を変えてしまうというのも一つの手だ。何をしたいのかは、はっきりしていない

が、専攻する学問分野は一応、英文学。留学するとすれば行きたい大学は決まっている。ミルズカレッジ。サンフランシスコのベイエリアにある女子大だ。学生時代、そこに留学していた友達を訪ねてからずっと憧^{あこが}れていた。(p.325)

大手保険会社勤務も下翻訳の手伝いも辞めて、アメリカに留学して英文学を専攻することで「英語で食べていく」未来が開けるとは思えないし、そんな人生設計なら大学生だった沙織は現実的ではないと分かっていたはずである。しかし、ほとんど勢いだけで今の状況を変えるようとしている自分に気づく余裕は沙織にはないのである。日本の都市部には沙織のようなOLたちが仕事帰りや週末に通訳翻訳学校や英会話学校に通いながら、「英語で生きていく」第二の人生を目指している。彼女たちの努力と金銭的投資はたいしたものである。そしてそれほど日本の企業はやる気のある女性たちに冷たいのである。そしてこうした女性たちを迎えて入れている通訳翻訳学校はあくまでも企業と同じく営利団体である。彼女たちに「君たちよく考え直しなさいね」とは言ってくれない。「大丈夫、独り立ちできる可能性は十分あるからお金と時間をここに投資しなさいね」とやさしく手招きするのである。1975年創業と1981年創業の翻訳専門学校のホームページには「よくある質問」に対する回答として期待を抱かせるには十分な文言が掲載されている：

「仕事を得るのに必要な資格や経歴はありますか？」企業が翻訳者を採用するために行うトライアルで実力が認められ合格すれば、お持ちの資格や経歴に関わらず仕事を始めることができます。仕事に応募する段階で語学や翻訳関連の資格やスコアが参考にされることはありますが、必須ではありません。

「未経験でも翻訳者になれますか？」英検2級程度の英語力があれば、翻訳学習を始めるのに問題ありません。また、英語力はもちろん調査力、表現力が翻訳には必要です。好奇心や向上心を持って、学習を続けるという意欲が大切です。

唯一すがって生きてきた「翻訳で食べていく」という希望が見えなくなった今、26歳のOLが日本から逃げ出すように留学という無謀とも見える選択肢に突っ走っていく姿はけなげで痛々しくもある。そんな彼女のもがきを理解してくれるような男性同僚たちは周りには一人もいない。留学資金確保のめどを探るべく、退職金額を何気なく通りすがりの営業マン（稲尾）に聞いてみたところ、周囲の男性社員たちは一斉に彼女が退職するものと思ひ込んでしまう。しかも、さっそく「どんな子が入ってくるのかな、代わりに」ともっと若いOLを待ち望む声や、「でも事業期の途中で辞めたら、ヒンシュクものですよ」と言う沙織に対し、稲尾は「平気、平気」「女の子なら、すぐでもOKだよ。二日あれば新人でもできる仕事なんだし」と無邪気に答える (p.327)。沙織はこの状況に驚いたりもしない。「さっさと辞めろ、と言わんばかりのことを二十六の沙織に言っているかぎりは、まだ趣味の悪い冗談で済む」(pp.327-328)という日本の職場を悟り切っている感すらある。結局、「OLは社員ではなく、オフィスの女」なのである (p.328)。沙織を呼び出した課長も彼女が退職するものと思ひ込んでおり、退職の意思の確認も引き留めもせず、退職理由も一切聞こうとしない。しかも留学先の入学が許可されるまでは退職をするわけではないという沙織の話に慌て、「優秀な沙織君のことだ、大丈夫。会社のことは心配しないでいいから、しっかり勉強したまえ」「それでは退職は、一応、八月末ということでもいいね」「じゃ、少し早いが一応、届けを出しておいてくれ」と矢継ぎ早

に言い強引に早期退職を確定させてしまう (p.333)。

男性社会の中でもがくOL沙織に対して同情や共感を抱く女性読者層は少なくないかもしれない。しかし、517ページの小説の後半になってようやく、沙織が思っているほど彼女の英語力が高くないことを読者は知ることとなる。「問題の読み違いや解答欄を間違えたりしなければ、ある程度はいけそうさ」(pp.331-332)と沙織が思っていたTOEFLの結果は462点という「^{さんたん}惨憺たるもの」で、500点がアメリカ大学留学の「最低ライン」なのだから「ミルズカレッジはおろか、大学留学自体がおぼつかない」のである (p.334)。しかしながら、彼女の反応は意外なものであった:「あと二カ月後に迫った退職のことを思っていた」ものの、「不思議と自分の軽率さを悔いる気にはなれない。それまで本気で考えもしなかった雇用保険のことを思い出したくらいだ」(p.334)。

これはよくあるパターン、なのだろう。「英語で食べていく」夢を持ち、通訳・翻訳学校や英会話学校に通ったり、会社を辞めて英語圏留学を考えてはいるものの、頼りの英語力が実はそれほど高くないということに当人たちも英語教育業界も気づかないふりをしている。または、大丈夫、今の英語力でも磨けばいいんだから、と楽観的に生きていこうとする。しかも英語が武器になって人生を変えた人たちがいますよ、と証言してくれるのは英語産業界だけでない。主要な経済雑誌さえも「大特集 英語で人生を変えよう!」という特集を組み、その「女性」向け特集として「英語力磨けば再就職も 主婦もグローバルに働ける」と謳い、「英語のおかげで、心が躍るようなやりがいのある仕事ができる。相手と通じ合ったときの喜びは何物にも代えがたいです」などの主婦たちの喜びの声を報道している:「結婚や出産で一回仕事を辞めてしまうと、女性が再就職するのはなかなか難しい昨今のご時世。でも、TOEIC高得点の実績や英語資格などがあれば話は別だ。英語で道を切り開いた主婦たちに続こう。」(『東洋経済』2014年8月25日号)。

そうした一人に沙織もなりたかったのだろうが、現実も小説の中もそう甘くない。そして元翻訳事務所勤務の中村さんにメールを送ったところ、大学の付属語学学校での勉強、という沙織が以前バカにしていた選択肢を提示される (p.336)。

とりあえずの語学留学とは、考えてもみななかった。バブル期のOLがよくやったことで、これこそまさに役立たずの代名詞、カルチャースクールの延長にすぎないとばかりにしていたのだ。TOEFLのスコアが足りないために付属語学学校に入ったが、とうとう大学入学はかなわなかったという日本人学生の話聞いたことがある。

だがここでもなぜか沙織は学生時代にはバカにして削除していた選択肢に簡単になびいてしまう:「しかし問題は、どこに入学するかではなく、そこでどう過ごすかなのだ、と沙織は考え直した。日本人同士でつるんで遊び回っていれば、大学に入学したところで、何の役にも立たず、退学に追い込まれることもある。しっかり勉強すれば、語学学校からステップアップすることもできる」(p.336)。だがそもそもOLも下翻訳もやめ、アメリカにある「憧れ」の女子大で英文学を学ぶという「ロマン」ある目標のために、最低ラインの英語力さえ達していない状態で語学学校に入学する、という選択肢こそ「まさに役立たずの代名詞、カルチャースクールの延長にすぎない」といえるはずだが、「どうせ会社も辞めてしまうのだ。日本を飛び出すのもいい。」(p.336)と半分やっけぱちである。

こうした沙織は等身大のOLなのだろうか。『女たちのジハード』に対するAmazonカスタマーレビュー48件の中で、沙織についてコメントしている投稿者がいた。その投稿者は総合職

で働いているため「一般職である登場人物の女性たちにあまり共感できなかった」が「私は沙織に考え方が一番近く感情移入していた」ものの、「深く計算して生きているようで、大事なことを衝動的によく調べもせず決断する場面ではややがっかりしてしまった」と書いている（2013年11月3日）。

さらに、沙織の準備不足はTOEFLの点数だけでなく、留学資金確保でも同じ状況であった。旅行や翻訳学校に給料を使い込み、親からの借金も百万円以上になっている状態で退職金も30万に届かないことを沙織は知り愕然とする。しかしここはいかにも小説らしく、問題は急展開して解決されてしまう。「トータルで百万近くかけたスキューバダイビングの免許」（p.337）を使ってバイトでもしようかと通学したダイビングクラブに連絡したところ、「金持ちのドラ息子」が絡んだ「沈没船探し」（p.337）という急な仕事を頼まれ、結局そのドラ息子の死体を引き上げ、180万円を数時間の作業で手に入れてしまう。「この日の百八十万と、退職金の二十九万ながし、合計二百十万円」を一夜どころか数時間で手にした沙織は「がんばって行ってこいよ、という運命の女神と、無念の死を遂げたドラ息子が、自分の背中を押したような気がする」（p.343）と意気込むが、彼女の頭からは親からの借金への返済意思も消え、留学の長期目標さえも見えていないのである。

渡米前の沙織を綴った章はこう締めくくられている：「行き先はある私立大学の付属語学学校。憧れのミルズカレッジに進めるか否か、見通しは立たない。自分の力を信じて努力するだけだ。」（p.343）。が、沙織が信じるべき「力」とは果たして何なのか。彼女が大学時代から磨いてきたはずの英語の「力」ではないことは読者にも沙織にも分かっている。では日本の男性社会の中でもがき、挑戦し、そしてその挑戦を捨て去る勇気なのか。それとも見通しの立たない人生に進んでいく無謀さなのか。沙織のアメリカ生活を綴った最後の章を意識しつつ、このあたりで読者の中には沙織が現地の白人男性と結婚でもするのか、または日系企業でバイトでもしだすのかと想像するかもしれない。しかし結末は小説らしく意外なものであった。

その前にまず沙織の甘さがまたもや露呈する。沙織はよりによって日本人が非常に多いことで有名なロサンゼルス語学学校を選んでいたのである。そして日本人の多さをこう嘆く：「ロサンゼルス郊外にある大学の付属語学学校に留学したのはいいが、ここまで日本人だらけだとは、想像もしなかった」（p.383）。さらに留学生寮のルームメイトは3人全員日本人で、しかも沙織と似たような境遇の無職の20-30代独身女性たちであった。沙織は「仕事にあぶれて留学してきた元派遣社員の女性」（p.385）、「元商社のOL」（p.386）、「日本人大嫌い症候群の女性」（p.386）たちとの寮生活から抜け出すべく、さっそくアパートの「ルームメイト募集」の広告欄を頼りに出かけるが、彼女を出迎えたのは乙畑法華という実家が寺で、会社を辞めて飛行機免許を取りに来た日本人男性であった。またもや日本人に出くわした沙織は「自分のことを棚に上げ」「なぜ太平洋を渡って、日本人が大挙して押しかけてくるのだ？」と「憤慨」する（p.390）。

こうした沙織の姿に自分を重ね合わせる読者もいるようである。Booklogに投稿された163件のレビューの中には次のようなコメントがあった：「個人的には沙織の戦いが他人事とは思えません。私も中学の頃から英語が得意で大好きで、バイリンガルになる、海外で働く！としか考えていなかったのも、もし大学留学が叶っていなかったら、私も彼女のように中途半端に翻訳の仕事したり、英会話教室通ったり、やっぱり留学しなくちゃ！って思い立って仕事辞めて日本人だらけの語学学校でもやもやしたりしていたらうなと。」（2011年12月13日）。

寮にすずすと戻っていった沙織は周辺が急速に「留学情報誌などで流布されている「日本人同士つるんで遊び回る」の定式に確実にハマっていきつつある」のを目にする（p.395）。沙

織は一人仕事帰りに英語磨きに励んでいたOL時代同様に、どうにか日本人の輪に引きずり込まれないようがんばる一方で、「孤立して勉強に精を出しているが、この状態が半年も続いたら、自分も彼らの仲間入りしてしまいそうで怖い」(p.395)と不安感を募らせる。そんなある日、ルームメイトのひとりである「元商社OL」の大学の先輩で、「前は自分で翻訳とかしてて、本も出している」経歴をもち、今は現地の会社で秘書をしている「蓬田」という女性が寮の部屋に遊びにやってくる(p.396)。こういうひとこそ「こちらの国に来て、英語で食べている人だ」と「大歓迎」して沙織は次々と質問を始める。そんな彼女を逆に遮り、蓬田は矢継ぎ早に現実的な質問を投げかける：「あなた、翻訳で食べていけると思う？」「つまり商品取り扱い説明書の類は嫌なわけね？」「それで食べていけるなんて、考えないことね。それともだれか強烈に惚(ほ)れ込んだ作家でもある？」「本当に原文を読んで、是非自分で訳文を出したいと思う人いないの？そういう人を自分で見いだしたいか思っていないの？」(pp.396-397)。

次々と質問を浴びせられた沙織は「返答に詰ま」り、結局また何をしたいのか分からない自分と向き合う：「翻訳家という職業もすてきだと思った。英語も好きだ。しかしあらためて尋ねられると迷う。いったい翻訳することに何を求めているのか？何を翻訳したいのか？結局、自分は何をしたいのかよくわからない」(p.397)。小説の前半では弁護士の笠原に向かって「ビジネス文書の翻訳スペシャリストとしてやっていけるといいんですが」(p.204)と言い、中盤でも「そしていつか下翻訳などではなく、直接、注文をもらい一本立ちしてみせる」(p.319)と握りこぶしを作って気合を入れていたOL沙織であったが、退職して数百万の投資をしてやってきたアメリカで「英語で食べていく」ことの難しさを思い知らされた、というのである：「頭がぐらくらしてきた。蓬田の引き締まった顔には、よく見ればどことなく疲れが滲んでいる。英語で食べていくというのは、想像以上に苦勞の多いことかもしれなく、今更ながら沙織は思った。」(p.398)

しかし、である。「英語で食べていく」ことの難しさは日本で味わってきたのではなかったか。細田の下訳も「芽がない」(p.324)と分かっていたはずである。だからこそほとんど現実逃避が目的でアメリカにやって来てしまったのである。そして英語投資の先には何も待っているものがないという日本と同じ状況がアメリカで再現されていることに沙織はようやく気付く：「何をしても日本ではうまくいかなかった。四年間、保険会社のオフィスで無為な時間を過ごした。下翻訳などという不本意な仕事もした。そしてとうとう日本を飛び出した。もしかすると逃げ出したのかもしれない。しかし日本はついてきた。」(p.401)。

TOEFLのスコアが足りないことを受験後に知り、日本でもアメリカでもとても就職には結びつかない女子大学での英文学専攻生活に「憧れ」と「ロマン」を感じてしまい、さらには日本人が多いことで有名なロサンゼルス郊外の語学学校を選んでおきながら日本人の多さに憤慨し、そして自分の甘さによく向き合った沙織は一体どうなるのか。ここでなんと読者は沙織が実はアメリカ大使館がご近所という高級住宅街育ちのお嬢様で、家族そろってアメリカびいきであったことを突然知らされる。

自分は何をしたいのか？翻訳？なぜ翻訳の仕事をしたいのか。英語で食べていきかけたから。なぜ英語でなければならぬのか。アメリカを好きだから。イギリスでも、オーストラリアでもなく、もちろんヨーロッパの他の国でもなくアメリカが好きなのだ。幼い頃から、身近にアメリカの文化があった。家が大使館の近くということもあり、近所にはアメリカ人が多く住んでいた。母の友達も、父の仕事仲間もアメリカ人が多かった。(pp.401-402)

ところで小説では沙織と両親とのやりとりは一切出てこないが、親が沙織の英語投資やアメリカ渡航を反対している、という気配もない。アメリカびいきの家庭なのだから当たり前なのかもしれないが、沙織という「娘」ではなくもし「息子」だったら同じような態度を沙織の親たちはとらなかったかもしれない。例えば、馬淵（2002）は日本人駐在員夫婦や帰国子女教育関係者の間で「非常によく語り交わされているディスコース」として、次の2つを紹介している：（1）「男の子は中学に入ったら、できるだけ早く帰国させて、国内の高校から大学進学へ備えなければならない。でも女子の場合は、様々な事情によって、海外の高校や大学を出ることになっても、将来はあまり困らない」、（2）「女子ならば、これからの国際化の時代に英語ができていればいい。でも男子は、語学力も大切だが、それだけでは足りない。やはり、国内でのよい進学、そして就職が、男子の場合、その人生を考えるとどうしても求められる」（pp.168-169）。女性なら、海外就職でも国際結婚でも好きなようにすればいいが、社会の柱となる日本男児は困る、ということであろう。また、日本人と白人の間の子供についてのケーススタディ（Kamada, 2010）や、日本人男性と結婚したアメリカ人女性へのインタビュー調査（Diggs, 2001）によると、「ハーフ」の娘なら、「かわいいね」と言われ、将来は「ハーフ」タレントや翻訳などの「英語をいかした仕事」を目指せばいいが、「ハーフ」の息子の場合は「日本人らしくふるまえ」という社会的プレッシャーが強く、外見とアイデンティティのずれから、より厳しい葛藤に直面するという。

ともあれようやく現実の厳しさと自分の甘さに気づいた沙織であったが、お嬢様育ちのせいなのか、後半になればなるほど彼女の行動は衝動的である。「乙畑」という飛行機免許取得目的の元会社員に偶然道端で再会し、そのまま彼が通うフライトスクールについていき、そしてヘリコプターの機体と轟音に感動してしまい、「スクールに入る？」と乙畑に聞かれた沙織は「うん」と「大して考えもせず、返事をしていた」（pp.409-410）。しかもその日のうちに行われた訓練飛行の最中、沙織の人生設計は突然「プロのヘリコプター操縦士になってアメリカで暮らしていこう」と180度方向転換してしまう：

眼下に見えていた空港が小さくなり、赤茶色の乾いた大地が視野一杯に広がっていく。茫^{ぼう}漠^{ぼく}たる大地だ。不意に、胸の中で熱い思いが弾けた。自分の求めていたものがわかりかけてきた。それは漠然とした英語力でも、キャリアを誇れる職業でもなかった。情熱をぶつけられる何か……。生きている証^{あかし}となるものだった。「ここが自分の人生の舞台となるのだ、と沙織は思った。決意ではない。幼いころからそう決まっていたような気がする。今、翻訳家になるという夢自体が、何かおぼろげなものに感じられる。中途半端な夢だった。翻訳という形で、日本語と日本に執着する必要など、どこにもない。（p.415）

なんとも劇的な急展開である。作者の篠田氏もさすがにこれは小説的すぎると思ったのかどうかは分からないが、さらに沙織自身に心情を語らせている（pp.416-417）：

とにかく自分の人生の夢、探していた将来をようやく見つけた。英語で食べていきたい、と確かに思い続けていた。しかし食べていくための英語は、所詮は人生の手段に過ぎない。その英語で何をしたいのか、ずっとわからなかった。わからないということがわからないまま、努力していた。幼い頃、目にしたアメリカ文化への憧れ、そして翻訳家という職業への憧れ……。何もかもが漠然とした憧れだった。憧れに引きずられてここまでやってきて、今、ようやく求めていたものに出会った。自分の活躍の場はここしかない。自分は今、ヘリコプターに

恋をした。一目惚れだ。計算ずくで将来など決まらない。

これではまるで、長年憧れ続けてきた男性との展開が見えずに意気消沈していた女性の前に突然異種のイケメンが登場して彼女の人生がばら色に輝き始める、といった漫画やドラマのストーリーのようである。沙織は英語や翻訳業やアメリカに抱いていたものが「漠然とした憧れ」だったと気づいたと言うが、彼女の次の行動は別の新たな憧れに乗り換えただけ、ととれる展開である。しかも26歳を過ぎてもなお親に経済的依存をすることを恥じる様子はない：「費用の点は、今の英語の講座を今学期限りで辞めて、こちらに授業料を回せばどうにかなるだろう。もし足りなくなっても、パイロットの訓練校に入ったと言えば、親も資金を融資してくれるだろう。何しろ、今度は返済できるメドがあるのだ。」(p.420)。親に返していない借金があることをこのお嬢様は完全に忘れていているどころか、「二十七歳を目前にして、ようやく離陸しつつあるのだ。」(p.420)と幸せを嘯みしめる。

渡米してヘリコプターの免許を取ろうとする夢見がちなOLが実際どのくらいいるのかは不明だが、乙畑の友人で元航空自衛隊管制官をしていた「高森」は少なくないと言う。それに対し沙織は憮然として自分は違うと言い張るのであるが、そもそも彼女は留学目的さえも決まっておらず、とりあえず入学した語学学校も中途退学している状態である (p.434)：

「よくいるんだよ。ただのOLやっているだけじゃつまらないし、ちょっと他人と違う資格が欲しいっていう理由で、航空機の免許を取ろうとする子が」

「一緒にしてほしいですね。そういうのと」

手にしたカップを沙織は音を立てて、テーブルに置いた。

「会社を辞めて来たんです。ヘリコプターのパイロットとして、仕事をしたいんです」

別にそのために、会社を辞めて来たわけではないが、今はそういう雰囲気だ。

(中略)

語学留学先から脱走したとは、言わなかった。

そんな沙織に高森は衝撃的な事実を伝える。乙畑が通い、沙織が入金しようとしていたパイロット学校が英語力も警戒心もない日本人だけを商売にしている詐欺的な学校であり、その事実は地元新聞に報道されていたというのである。なお、実際の報道としては、外国人生徒たちを募集し詐欺行為を行う学校の実態について、アメリカの国土安全保障省はそのホームページ上で情報を掲載し、注意を促している(例：「ロサンゼルスの飛行学校オーナー、ビザ詐欺容疑で逮捕」, 2011年11月30日)。

正規のパイロット訓練校では決してさせてないような「訓練」飛行中に乙畑は墜落して入院してしまうし、しかもそうした「訓練」事故は最初ではないというのである。沙織はまたしても希望が遠のいていくのを感じる：「ようやく開きかけた扉がまた一つ、鼻先で閉まった。離陸大勢に入ったと思ったら、滑走路が途中で切れてしまった。それではまた、あの語学学校へUターンするのか、それとも尻尾しっぽを巻いて日本に帰り、父の新聞社でアルバイトをするのか……。」(p.438)。さらに、航空自衛隊で管制官をしていた高森が英文科出身でもないのにTOEFLスコアが自分のスコアよりも100点以上高い600点越えであること、管制官が「完全な英語が使えないと、飛行機を落としてしまう」ことを知り、英語力を武器に生きていこうとしていた自分のため息をつく：「我知らずため息がもれた。以前、あの笠原という弁護士が言った通りだ。英語など特技でもなんでもない。特技を身につけ、発揮するための手段に過ぎな

い。できて当たり前，できなければ話にならないものなのだ。」(p.439)。

そこまで悟ることは出来た沙織であったが，彼女のとった行動は語学学校への再入学や日本への帰国ではなく，高森が通うアリゾナにあるプロのパイロット養成校への入学であった。さすがに衝動的すぎないか，と一瞬考えるが，この選択肢しかもうないのだ，と今回も沙織は即断即決してしまう (p.442)。

少し冷静になってみると，いくらヘリコプターを見て感動したからといって，それで語学学校を学期途中で退学し，航空学校に入ろうとしたこと自体が，衝動的過ぎたような気がしてくる。ヘリコプターのパイロットなどというのも，結局は見果てぬ夢なのか……。そんなことはない，とまだ残っている心の熱い部分が否定する。できるかできないか，などというのは，やってみなければわからない。確かなことは，好きなことなら，やり通すことができるということ，自分はヘリコプターに人目惚れした，ということだ。いずれにせよ，語学学校もやめてしまったし，乙畑の紹介してくれた航空学校の入学も取り消した。こうなったら，高森の言うTOEFL600のパイロット養成校に行くしかない。やけっぱちな度胸を決めて，沙織は乙畑に別れを告げ，病院を出た。

冷めた目の読者にもやけっぱちの沙織は渡米前とまるで変わっていないようにも見える。大学時代には女が留学して学位を取ったところで企業は相手にしてくれないと分かっていたのに，OL生活も下翻訳もどうにも先につながらなくなると，昔馬鹿にしていた海外語学留学という選択に飛びついてしまう。何故英語なのか，留学して英語は伸びるのか，憧れのミルズカレッジで英文学を入学できたとしてその後どうするのか，自分は何をしたいのか，という大切な問いに真剣に向き合うことなく，「とりあえず翻訳だ」「英語で食べていきたい」「それしかないのだ」「理由はつきつめて考えたくはない」「思い悩んでいるより，先に状況を変えてしまおうというのも一つの手だ。」(p.325) と日本を飛び出してしまふ。

そして猪突猛進型の沙織の章はエピローグに近づく。高森と一緒に到着したアリゾナの学校ではオーナーから分厚いテキストを渡され，ホームステイ先でその「電話帳ほどの厚さの本」と格闘しながら沙織は自分のこれまでを振り返る。アメリカの大学寮で翻訳の仕事をしている日本人女性と出会い，「英語で生きていく」ことの難しさを思い知られた際は，翻訳という英語投資とそれを支えたOL生活はすべて「無為」で「不本意」で，そんな日本の生活から「逃げ出したのかもしれない」と悟った沙織であったが，実はそうした投資は無駄ではなかったのだと思ひ直す (pp.448-449)：

沙織は目の前で閉ざされていったいくつもの扉と，つまずきの石のことを思った。それらは決して挫折という結果をもたらしたのではなかった。そのたびに繰り返されたわけもわからない，がむしゃらな努力は，何一つ無駄になっていなかったのだ。確かにそれらは沙織に半端な報酬を与えてくれはしなかった。だれもその努力に対し，頭を撫でてはくれなかった。しかしそれは「力」というもっとも確実な果実を自分の内面にもたらしてくれた。

(中略)

「今度こそ，将来を確実なものとして，思い描くことができた。三十を過ぎて花開くであろう自分の人生を。」(p.450) と，プロのヘリコプターパイロットとしてアメリカで活躍する沙織という言葉聞いて世のOLたちはどう感じるであろう。アフターファイブや週末にあれこ

れ英語投資を試しては先につながりながらもがいている日本中のOLたちや、日本を飛び出してもこの未来が見通せない元OLたちなら、沙織の言葉は力強く響くかもしれない。しかし、である。TOEFL500点に達していない沙織が描く明るい未来予想図に何の確実性もない。そもそもまだ一度しか乗ったことのないヘリコプターという一目惚れの相手に生涯惚れ続けられるのか、という保証もない。しかも元OLたちが押し寄せる語学学校と違い、プロのパイロット養成校は男社会であることを沙織は初日から既に目にしている (p.447) :

日本人の二人は、三年間、運送会社で働き費用を作ってやってきた、と言う。もう一人はこちらの企業に就職していた。年ごろは、沙織と同じくらいだが、それぞれに一癖ありそのような精悍な面構えをしている。彼らが社会に出てから過ごしたであろう厳しい年月と自分のこの四年間とを無意識のうちに比べ、沙織は軽い劣等感に捕らえられた。

さらに実家に呼び戻されることになった容姿の悪い乙畑に同情していた沙織であったが、彼が零細企業や商店の長男どころではなく、大邸宅も自家用飛行機も海外別荘も所有する大手ホテルの若社長というお坊ちゃまで、おじいさんは大臣、おじさんは知事を務めた家系であることを容姿端麗の高森から知らされた沙織は自分の人を見る目の甘さも思い知る：「背が低くて、近眼がひどくて、頭は若白髪で、同じ人間として生まれてきたというのになぜこれほどの不平等があるのか、とほんの少し前まで、高森と比べては同情していた自分の愚かさを思い知らされる。」(pp.452-453)。しかし沙織を描いた最後のページはあくまでも楽観的である。1週間だけのホームステイ先の家族との最初で最後のピクニックをしようと、車で迎えに来てくれた家族たちに向かって走っていく沙織の姿で終わる：「景色と空気と人々、すべてが自分に微笑みかけているような気がして、沙織はそちらに向かって駆け出していった。」(p.454)。

このあとの沙織はどうなるのか。1年以上の訓練に耐えてヘリコプターパイロットとしての一步を踏み出すのか、脱落して別の憧れに投資を始めるのか、それとも現地で結婚し主婦となるのか、または帰国して父の新聞社でバイトをするのか、通訳学校に再び通い始めるのか。篠田氏は「それぞれが自分の道を見つける小説を書いたつもりで、サクセスストーリーではありません」と語っており、想像は読者に委ねられたわけであるが、篠田氏もそうするしかなかったのだろう（『第117回芥川・直木賞贈呈式—受賞の3氏、精進誓う』『毎日新聞』1997年9月1日夕刊6頁）。なぜなら教育産業もメディアも、英語を武器にして輝く女性たちを華々しく宣伝する一方で、そううまくいかなかったはずの多数派側の話については沈黙を守っているからである。そしてその沈黙があるからこそ、現役女子大生とOLが「英語で生きていく」という人生設計に現実性と将来性を見いだす余地を与えている。

小説に登場する「英語圏で生きる日本人女性」

本稿の後半では前半に倣い、英語と日本人女性の関係を扱った小説を概観するが、ここでは英語圏でOLとして生きる日本人女性の描写に注目していく。一冊目は既に紹介した直木賞受賞作品『女たちのジハード』（篠田 節子, 2000）なのだが、小説の中盤で「蓬田」という女性がロサンゼルス郊外にある語学学校の留学生用寮に現れる。彼女は主人公「沙織」のルームメイトのひとりである「元商社OL」の大学の先輩である (pp.539-542)。2冊目に選んだのは『プライベートバンカー カネ守りと新富裕層』（清武 英利, 2016）というノンフィクション

作品で、シンガポール銀行勤務の「中村咲子」や彼女の友人たちが登場する。野球ファンならこの作品の著者の名前を見て「ああ、あの人か」と思いつくひとも多いだろうし、そんな著名な著者の作品とあって出版当時は全国紙やビジネス雑誌などあちこちで紹介されていたため、インパクトの大きさはかなりのものと推測していいだろう。

『女たちのジハード』の蓬田

まず『女たちのジハード』に登場する蓬田についてみていこう。部屋に入ってきた「見慣れない顔の三十代半ばくらいの女」を見た沙織は「オークル系のファウンデーションと、細く弓形に描いた眉、強いアイメイクから、こちら在住の人というのが一目でわかった。」というのだから、蓬田の海外生活歴は1、2年ではないのだろう。彼女が翻訳本を出したことがあると聞き色めき立った沙織は「どんなものを翻訳されたんですか?」「出版関係の会社にお勤めなんですか」「それでは、アメリカの文化とかを理解するために、こちらの会社にお勤めになってるんですか?」と「矢継ぎ早に質問」するが、蓬田はそんな沙織に対して「醒めた笑いを浮かべ」、翻訳では生きていけないこと、今の仕事は日本のOLと大差のないことを淡々と説明し始める：

一冊、翻訳するのに何ヵ月もかかって、ようやく終わって出版社に持っていったのはいいけど、いつまでたっても出版されないなんてケースはいくらでもあるのよ。たとえされたにしても、部数が少ないし、自分自身の満足のためにやっているみたいなのよ。それで食べていけるなんて、考えないことね。(pp.397-398)

工作機械の特殊部品製造会社。日本に輸出しているんで、私はそちらのセクションの窓口になっているの。日本の会社の担当と、こちらのボスとの橋渡し役。一言で言えば、双方の苦情処理係。貿易摩擦以前に、小さな文化摩擦がたくさんあるから。仕事はハードよ。仕事以外にも、日本からきた客を休日にゴルフに連れていくなんてことは、日本人でなきゃできないし、しかも女性だからいろいろ重宝されるわけ。(p.542)

話を聞いて沙織は「頭がくらくらしてきた」とあるが、大学の英文科在籍当初の沙織のほうが冷静に、日本での厳しい現状を達観していたことを読者は覚えているだろう。つまり「向こうの大学の厳しい授業で単位を取ったところで、日本の企業では女性の能力はほとんど生かされないこと」、英語力があっても「英文のビジネスレターの下書きや、英文の書類のコピーと訳といった雑用を押しつけられるのが関の山」、「外資系会社も、日本支社の上司が日本人であるケースが多く、状況はそれほど変わらない」ということは分かっていた。ただ一方で、「OLをしながら能力を磨き、ビジネス英語スペシャリストを目指すという選択肢のほうが「現実的な人生設計」だと考えてしまうあたりは、やはり英語業界の宣伝文句の影響からは逃れられていないといえる。

実際前述したように、大手の通訳翻訳学校のウェブサイトを見れば、英語力も経験もなくても大丈夫、あなたの未来は明るいですよ、といった文言が謳われているし、海外就職支援サイトにも必ず「海外で私らしく」「自分らしいライフスタイルを満喫させていっしょに」日本人女性たちの笑顔の写真と経験談がいくつも紹介される。「海外で働く女性は元気でイキイキしています」と文言が躍るこうしたサイトにアクセスする女性たちの中には、長く働くことを期待されていないOL生活を送りながら英語で生きていく第二の人生を計画したものの、うま

くいかなかった沙織や蓬田のような女性も含まれているだろう。しかし、そんな声はそこには掲載されていない。その意味で『女たちのジハード』が直木賞を受賞して大きな注目を集め、英語で生きようとする（ほかない）女子大学生やOLたちの現実と葛藤を一般読者が知ることになった価値は大きい。

『プライベートバンカー カネ守りと新富裕層』の中村 咲子

次に紙面を割いて紹介したいのは『プライベートバンカー カネ守りと新富裕層』というノンフィクション作品に登場する日本人女性である。日本企業の経営者たちが主な読者層であるビジネス雑誌の「著者インタビュー」の冒頭で、この作品と著者は以下のように紹介されている（『プレジデント』2016年11月14日号）：

死亡時に下りる金額が100億円という保険が、本書に登場する。もちろん、日本でそんな保険商品はない。しかし、海外にはある。「相続税対策として、この保険に加入している日本人資産家は少なくない」と著者は言う。一代で財をなした新富裕層には、税率の低い国に移住する者も多い。今、東南アジアにおけるその一大拠点がシンガポールだ。プライベートバンカーとは、そこで個人資産家を相手に、税金逃れの水先案内人を務める銀行員。「金の傭兵」「マネーの執事」とも呼ばれる。著者は、読売新聞の社会部で、長く国税庁を担当。1997年の第一勧業銀行総会屋事件や山一証券の破綻をスクープした実績を持つ。当初は「国税庁と巨額の税逃れをする資産家の攻防を描こう」と考えた。だが、何人ものプライベートバンカーを取材するうち、関心が彼らに移った。

ジャーナリストによるノンフィクション作品で、「中心人物とほか数名は実名で登場」しており、「初版で匿名だった取材相手に実名扱いの交渉を行い、重版時に加筆している」と言う。この中で脇役以上の人物として登場するのが「中村咲子」というシンガポール銀行（BOS）でプライベートバンカーのアシスタントとして勤務する女性である。

彼女が作品に最初に登場するのは序章の冒頭である。税金逃れのためだけにシンガポールに5年間暮さなければいけなくなり「退屈で死にそうや」「日本に帰りたいわ」と焼き鳥屋で泣き言を言っている資産額30億円以上の元不動産業の50代男性を相手に、「何を言ってるんですか、また！^{ぜいたく}贅 沢ですよ」（p.9）となだめているが咲子である。咲子の仕事は銀行員とはいえず『こうした富裕層の憂さを晴らす接待要員』であり、彼女は「極めて有能なアシスタント」として、顧客と一緒に顧客の金で酒を飲みながら「ご機嫌伺い」をし、「日によっては酒乱と疑われるほどに盛り上がる」せいか、「どの顧客にも好かれていた」という実在の人物である（p.11）。『女たちのジハード』に一度だけ登場し、アメリカで就職したものの「日本企業のオヤジの相手」をしたり、「女性だからいろいろ重宝」される仕事をしている蓬田と重なるところがある。

しかしアメリカでの会社勤めに疲れたように見える蓬田とは異なり、咲子は現在の職で終わるつもりはない。脱税のために海外で時間が過ぎるのを待ち、「暇を持って余している人種を見ていると気の毒でしかたない」し、「カネはなくても、「やっぱり、あんたの人生おもしろいね」と自分自身に向かって言えるような生き方がしたいのだ」という（p.16）。この辺は『女たちのジハード』の沙織と近い。ただ「英語で食べていく」ことが自分の夢だと思いつけ、だれから引き留められることもなく渡米した沙織とは違い、咲子には親が認めた結婚相手（和菓子屋三代目）がおり、一年で日本に戻ってくるという約束でシンガポールに渡った。しかし投

資顧問会社に就職した後BOSに転職したあとも日本に帰らず、すでに6年が経ってしまっている、というのが作品の前半部分の咲子の現状である。

また実家がアメリカ大使館のそばという高級住宅街育ちで家族がアメリカびいきという沙織とは異なり、咲子は三重県という地方出身者で、地元の中高一貫教育の女子学園から名古屋のカトリック系大学に進学しおとなしく暮らしていた。転機が訪れたのは19歳の夏休みに経験したマイアミでの語学留学であった。「アメリカの自由な空気に触れ」たことで「奔放な一面が解き放たれ」、周囲の親や親せきや教師たちが「押し付けてくる」良妻賢母や「同質と協調の価値観」に反発するようになり、2002年、大学卒業と同時にニューヨークに移住目的で渡ってしまった（p.59）。ただその移住計画は前年のテロ事件での余波で就労ビザが取れないことで頓挫し、その後はフランスで放浪生活をしたり、日本に帰国して親公認の結婚寸前までいったりしたが、結局二十四才で「恋人を放り出してシンガポールで自立」するに至っている。つまり、咲子には日本での職歴はゼロであり、大手火災保険会社で先の見えない生活にもがいていた沙織達とは状況が異なる。さらに「英語で食べていく」ことを夢見て通訳翻訳学校に通っている沙織のような都会のOLたちとも異なる。しかし咲子のような地方出身者で、地元で主婦・母親として過ごすのが嫌で、「こんな生活はちっとも面白くないし、あと二年もこんなことしてると、私は死んでまうわ」（p.60）、と世界に飛び出す女性たちも実在するのである。

実際、知り合いに海外在住者がいなくても地方で暮らしていても、現代社会では簡単に海外就職情報にアクセスできてしまう。咲子の場合も求人サイトでたまたまシンガポールにある日本人経営の会社の採用情報を見て応募し、東京の面接を経て合格した、というケースである。二十四才の時に一年、という期限付きで許嫁の和菓子屋の跡取り息子は許してくれたものの、六年間もそのまま働き続けてしまい、その間「このまま働きたい」だけでなく、「独立する夢」も抱くようになっていた。

結婚することは三重県の田舎に戻ることを意味する。そのうえに、彼の家の四代目、つまり男の子を生むことを期待されている。そんなミッションは私には無理かな。

（中略）

彼女はいつか独立する夢を持っていた。結婚で人生を終わらせたくなかったのである。いま働いているBOSも通過点に過ぎなかった。とりあえず、シンガポールで生きているのも、就労ビザや永住権が取りやすかったため、米国やフランスでの可能性を消していった消去法の結果に過ぎなかった。（pp.60-61）

シンガポールでの通過点として生活を楽しんでいる様子の咲子であったが、海外在住でお金には苦勞していない日本人男性たちのアシスタントや接待をしている女子たちの生活はあくまでも質素である。日本から逃亡中の超富裕層の子守役の咲子はチャイナタウンの「格安の部類」の「ぼろアパート」に住んでいる（p.133）。とはいっても家賃の高さは世界一のシンガポールではそれでも月十万円を超えているが。

後半（pp.197-201）の「接待要員」では終わらない」という短い節で再び中村咲子が登場し、その性格、英語学習歴、「接待要員」としての仮の姿、しかし、仕事は仕事として割り切るプロ意識、強い起業意識などが明かされる。こうした彼女の素顔については取材中に著者が得た情報や印象に基づいているのだろうが、作品の主人公のプライベートバンカー・杉山からの視点として描かれている。

まず、富裕層という最優先のクライアントの接待ならプライベートバンカーたちがすべきな

のだが、彼らはそれが「面倒でしかたない」ため、「負い目」を感じつつも咲子のようなアシスタントにそれを「背負わせている」。咲子に言わせると「一億、二億のカネはポンポンポン出すくせに、一万、二万の話は、細かければ細かいほど気になる」というクライアントたちにとっても、会社から派遣される銀行員女性と時間を潰すことは「実にお得なことなのだ」という。何故なら「シンガポールでは、日本人向けのキャバクラで女の子としゃべろうと思ったら、一時間百シンガポールドル（約六千三百円）は取られる」が、咲子なら「席の横についてもチャージ（請求）されないし、お客の好みも事情も知っているし、延長料金もない」し、「彼女と飲んで憂さを晴らすことができる」のである。咲子のような日本女性たちがこんな「仕事」を心底楽しんでいないことは当たり前である。

シンガポールや海外で契約社員として現地採用される日本人女性たち同様、咲子もすでに何度も転職を経験している。シンガポール銀行では「四日連続で客に付き合わされて体調を崩した」こともあったし、連日居酒屋やゴルフに付き合いつつも「日中、会社の会議にも出なければならず、飲み過ぎと寝不足で肌もボロボロになっていた」こともあった。そんな中、日本人男性スタッフから「接待能力があるんですが、アシスタントとしては使いにくい」ということが上がり、上司が「じゃあ秘書にするか」と話している、と聞いた途端、「あっさりBOSを辞めて」しまい、すぐに「丸紅の関連会社や投資会社」で働いたのだが、「なぜか退職して」、五番目の職場として「起業家相手の」「金融街の大通りに面した清潔な会計事務所」で働いていた時に、作品の主人公のプライベートバンカー・杉山と再会した、という設定になっている。

自分の生きたいように生きているように見える咲子を主人公の杉村はうらやましいような、ハラハラするような複雑な思いで見ている：

咲子という人間について尋ねられると、杉山は上手く表現できずにいる。三十歳を過ぎると、特に女性の夢は急速に現実には近づいていくが、彼女の関心は結婚や両親のことよりも、遠い自分の夢に向いている。生活感もなく、今が楽しければいいというように杉山には見えて、危なっかしくてしたかない。

しかし、海外で好き勝手に生きている日本人女性のように周囲には見える（見せている）が、実は彼女は海外で起業する、という夢に向かって着々と努力を重ねていた。今の会計事務所でも「働きながら、個人的に日本人の移住支援や法人設立、記帳代行、通訳といったビジネスを続けて」いたし、英語上達の努力も怠っておらず人並み以上の実力を持つまでになっていたのである。しかし、あくまでもその努力を周囲には感じさせないところが彼女の強みでもあり、誤解されるところでもある：

仕事で使う英語は達者だし、英文会計の腕もそこそこののである。だが、そもそも努力や苦勞の素振りが見えない。英語はきっかけがあって好きになり、米留学で上手くなった。三重の実家近くのカトリック系学校があって、そこにアメリカ人のシスターがいたのである。英文会計は、丸紅の関連会社で講習を受けたりして身に付けた。一念発起して頑張った、というところがない。

19歳で体験したのはマイアミでの短期語学留学だし、名古屋のカトリック系大学にシスターがいたからと言ってマンツーマンの英語の授業を受けたわけでもなさそうである。同じような語学留学や大学生活をしつつも英語力が伸びずに卒業する英文科卒の女子大学生のほうが多

い。そんな中、咲子は周囲のひとには気づかれぬように振舞いながら、人一倍努力と苦勞をし、シンガポールでの接待要員生活をプロ意識でこなし、今は起業準備をスタートさせるころまで来ている。実際、著者は「あとがき」の中で咲子を「シンガポールで一足先に独立を果たし、しぶとく生き抜いている」日本人女性、と回想している（p.262）。

彼女の気丈さを窺い知ることが出来る描写が後半でいくつかある。シンガポール銀行の「ブースでさえぎられた机の上に「キティちゃん」の小さな鏡を置」き、接待前のメイクに集中する彼女を見て「お前はアホだな」と上司に「叱られてもにっこりしている」し、どんな「居酒屋に呼ばれても客の愚痴はきちんと聞いてやっていた」し、「肝が据わっていて、嫌な顔を見せない」咲子だったが、「接待要員として扱われることが本意でなかったことは確かだった」からこそ、その後転職を繰り返しつつも、起業のノウハウとネットワークを培い、独立への夢をかなえようとしているのである。読者は後半でまだ「実体のない「空箱」」ではあるが「十九歳のころから憧れていた島」のマルタ島に焦点を定め、「Malta」という個人会社を設立していることを知らされる。また、日本人同士のネットワークの重要性をよくわかっている彼女は元の同僚とのつながりを切ったりはせず、彼女が会計事務所を辞めて独立を果たした際もシンガポール銀行勤務時代の同僚たちからちゃんとお祝いをされている。そして夢を夢で終わらせない覚悟の咲子とそんな彼女を見つめる杉山（としての著者）の語りでこの「接待要員」では終わらない」という節は終わっている：

マルタは人口が四十万人、日本人もたった百三十人しか住んでないの。シンガポールに比べると不動産価格も安い。あそこもオフショア（課税優遇地）で法人税率がわずか5%なのよね。会社を設立するのも英語で簡単だから、自分で会社を作っちゃえばいいな、と思ってね。日本人相手か、日本やアジアがらみじゃないとビジネスは成功しないと思うし、友達に飲食業をやっている人もいるから、マルタワインやマルタビールを扱うのも面白いかなと思うの。

彼女はシンガポールの永住権を持っている。それを持ったまま、シンガポールとマルタを行き来し、「空箱」を利用して商売を始めることができるはずだった。その夢を語るとき、彼女の顔は二十四歳でシンガポールにやってきたときのように上気していた。だれかに雇われている身ではなく、自力で「完全独立」の姿を彼女は思い浮かべていた。

ところでこのノンフィクション小説のちょうど折り返し地点で、咲子の現地での知り合いである日本人女性たちの生活が紹介されている。四ページ（pp.133-136）に渡って描写されるのが咲子の友人・佐藤敦子で、彼女は節約のため七人で一つのコンドミニウムに共同生活をしながら、レンタルオフィスのアシスタントマネージャーとして働いている。咲子と同じく地方出身で、その恋人は地元（長崎県）では知られた製造メーカーの正社員だったが、彼女自身は作業服を着て工場作業をする非正規社員で「イケてないエリア」に住んでいた。就職三年後には「私の人生はこの作業服を着たまま過ぎていくのではないかと考えるようになり、「異国に対する憧れを捨てきれず、代わりに恋人を捨てて、二十歳代でシンガポールに渡ってきた」のである。

彼女の学歴については一切書かれていないが、高卒かもしれない。格差が拡大するばかりの日本では「自分のように一度、非正規に落ちてしまうと、もう戻れないような雰囲気を感じ取って」いたし、「正規社員に這い上がったとしても、それで幸せになれるのか、という疑問

が拭えなかった」し、恋人との将来を思い浮かべても「建て売り住宅なんかをやっと買って、一生過ごすのかあ」と「どこにも浮き立つものが見つけれない」し、「週末に友達と飲みに行っても、楽しくないな、という思いがだんだんこみ上げてきた」矢先に、ネットでシンガポールに働き先を見つけたのである。

ここだけを読むとあまりにいきなりすぎる感じがするが、実は敦子は工場で働きながら海外就職の準備を始めていたのである。半年以上オンライン英会話学校で学び、シンガポールは女性にも安全であることや脱税目的の富裕層たちがシンガポールに流入している今なら「カネの風に乗」れることもチェック済みだった。「二十代の女性が田舎で地味に生きる虚しさや、会社が敷いたレールの上を走る息苦しさが理解できない」恋人は「まあ、一年くらいすれば帰ってくるんでしょ？」と渋々渡航を認めてくれたが、一度帰国した時点ですでに彼との将来は選択肢の中には残っていなかった。敦子のように、日本で非正規社員として工場で働いている高卒女性たちや地方大学卒でも、名の知れた日本企業の海外支社に勤務し、履歴に拍を付けることも不可能ではない。日本の大企業に勤務するOLたちがそのブランド力を捨ててまで海外転職しようとするケースは少ないかもしれないが、咲子や敦子のような地方出身者や学歴で劣る女性たちにとって、海外就職は国内の女性間格差を乗り越える有効な一手である。そして、アジアの経済ハブであるシンガポールは彼女たちにとって大いなる可能性を秘めた場所である。敦子は「咲子のようにいろんなものを捨ててやってきた女性もたくさんいて、やれるところまでやってみよう、と考えられるようになった」と語っている。

もちろん、シンガポールでも女性間格差は存在する。敦子自身はシンガポールでは「見渡すと多くの女性たちが高い地位にいて」日本よりも女性が社会で活躍しやすい、と日本とシンガポールを比較しているが、そんなバリバリと働くシンガポール人女性たちを支えているのは自国に自分の子供たちを残し、安い賃金で家事と育児を担うインドネシア人やフィリピン人女性たちである。ただ子供を自国に残してまでも出稼ぎに出なくてはならない女性たちの存在に気づく、または気にする余裕など海外就職組の日本人女性にはないのかもしれない。なんといっても、彼女たちはメイドと同じように期限付きの現地採用であり、来年度どこで何をして働いているのか分からないのであるから。

おもしろいことに、日本を飛び出しシンガポールの生活に充実感や夢を感じている咲子や敦子などの独身女性たちの描写のすぐあと、今度は日本に帰りたくてたまらない富裕層の母や妻たちの話が三ページに渡って描かれている (pp.136-138)。夫や息子たちには「節税というはっきりとした目的があるから我慢もできるが、女性にはその意識が希薄」だし、「もともと移住しようというモチベーションがなく、語学が不自由でローカル社会に溶け込めない」し、現地駐在員妻たちとは違って「友人もいないことが多い」からだという。「海外在住の日本女性」、と聞くと、昔から語学や異文化コミュニケーション好き、というイメージが湧くが、そうしたイメージとは対照的に「語学が不自由でローカル社会に溶け込めない」高学歴・富裕層の日本女性たちも少なからず存在しているわけである。作品の中ではパートナーに離婚を迫ったり、精神的に不安定になり頭に「小さなハゲ」が出来てしまったり、自殺騒ぎを起こしてしまった、という例も短く羅列されている。「おカネを残すのはお前たち家族のためなんだ」「俺は我慢しているのに、お前たちはどうしてわからないのか！」と言われても、数～数十億円資産が減ったとしても「私は日本がいい。少々貧乏でもやっぱり日本に住みたいんです」と一人で日本に戻っていく女性も珍しくないらしい。お金よりも生きがい大切なのでしょうといってしまう簡単だが、「シンガポール在住の日本人女性」たちの中は「経済力は低いが生活満足度が高いひと」も「経済力が極端に高いが生活満足度が低いひと」も存在することを示す実

例として興味深い。

研究者が一般社員の仕事ぶりを調査することは非常に難しいし、海外で現地採用されて働く日本人女性たちの実情調査についても同様である。その意味で、実在の日本人女性たちの奮闘ぶりがある程度の紙面を割いた『プライベートバンカー カネ守りと新富裕層』は貴重である。ただ女性読者層を引き付けた『女たちのジハード』とは異なり、この作品がビジネスマン向けに位置づけられてしまったことは残念である。Amazonカスタマーレビュー54件、読書メーター感想・レビュー151件をみても、こうした女性たちへのコメントは以下の感想を除けばひとつもなかった（2017年12月1日現在）。

小説風の書き方が分りやすく読み進めやすかった。主人公の杉山が受けるプレッシャーは営業を生業としている人にとっては誰もが経験するものだと思う。金額の単位が違うくらいか？杉山や、咲子のこのままでは終りたくないという気持ちも良く分る。それにしても、シンガポールの違う側面を知って、世界を見る目が変わってしまった。使い切れないほどの富を手にとることと幸福とは必ずしもイコールではないということに改めて感じる。（読書メーター感想・レビュー、2016年10月2日）

今後の展望

本来ならばここで今回取り上げた小説を踏まえ、関連する研究文献の概観を行い、問題提起や今後の研究展望を示すべきである。しかし紙面制約上、それらの内容については次回的小林（準備中）に譲りたい。ここでは日本人女性と英語の関係を描いたNHKドラマ2本に注目したうえで、このテーマについての議論を深めていく予定である。また日本人男性と英語に関する文献も概観する。なお、本稿を執筆するにあたり、事前調査として、『女たちのジハード』を題材とした学術論文について検索データベースを使って調査したところ2本しか検索できなかった。『国文学』に掲載された論文（小林 美恵子, 2010）は沙織以外の主要登場人物についてごく短く概観した内容で、もう1本（Heal, 2003）は登場人物たちが置かれた日本社会の特徴を考察した内容であった。『女たちのジハード』を題材とした学術論文数が非常に少なかったことは予想外であった。ただ、本稿が取り上げた「英語（圏）で生きていきたい日本人女性たち」という視点からの論文を見つけることが出来なかったことは想定内であった。なぜなら「英語学習と日本人女性」というテーマに興味を持つ英語教育学・応用言語学または関連分野の日本人学者たちの数がそもそも非常に少ない上、そうした学者たちが小説やドラマを研究材料として注目することはさらにまれなためである。逆に、海外研究者たちの間では「英語学習と日本人女性」というテーマは非常に人気がある（例：Kobayashi, 2002, 2007）。その背景については小林（準備中）で概観したい（Kobayashi, 2018も参照されたい）。

参考文献

- Diggs, N. B. (2001). *Looking Beyond the Mask: When American Women Marry Japanese Men*. New York: State University of New York Press.
- Heal, L. (2003). Women's 'Holy Struggle': An introduction to Shinoda Setsuko's *Onnatachi no Jihaado*, with particular reference to Chapter 1: 'Naïve'. *椋山女学園大学文化情報学部紀要*, 3, 1-18.
- Kamada, L. D. (2010). *Hybrid Identities and Adolescent Girls: Being 'Half' in Japan*. Bristol: Multilingual Matters.
- Kobayashi, Y. (2002). The role of gender in foreign language learning attitudes: Japanese female students' attitudes towards English learning. *Gender and Education*, 14 (2) , 181-197.
- Kobayashi, Y. (2007). Japanese working women and English study abroad. *World Englishes*, 26 (1) , 62-71.
- Kobayashi, Y. (2018). Japanese female students' positive attitudes toward language study. *The Evolution of English Language Learners in Japan: Crossing Japan, the West, and South East Asia* (pp.45-60). New York: Routledge.
- 篠田節子 (2000). *女たちのジハード* : 集英社.
- 小林美恵子 (2010). OLというプレカリアート : 『女たちのジハード』にみる〈獲得〉までの闘い. *国文学*, 75 (4) , 151-157.
- 小林葉子 (準備中) ドラマと文献から考察する「日本人女性(男性)にとっての英語」(2)
- 清武英利 (2016). *プライベートバンカー カネ守りと新富裕層* : 講談社.
- 馬淵 仁 (2002). 「異文化理解」のディスコース—文化本質主義の落とし穴 : 京都大学学術出版社.